

# 山菜の採取地としてのエコトーン

## 兵庫県旧篠山町と岩手県沢内村の事例からの試論

Wild Edible Plant Gathering Activities Practiced at Ecotones

齋藤暖生

① 序論

② 篠山の場合—二次的エコトーンに展開される山菜採り

③ 沢内の場合—一次的エコトーンと二次的エコトーンの使い分け

④ 考察

[論文要旨]

エコトーン（生態学的移行帯）は生物多様性の保全、資源管理を論ずるうえで重要視されている。本稿は山菜採りの事例を題材にし、これまで十分に議論されてこなかったエコトーンに展開される人間の生業活動の実例をしめすものである。照葉樹林帯に位置し、周辺のはほぼすべての植生が二次植生である兵庫県旧篠山町では、農作業に伴う頻繁な植生攪乱によって生じた二次的エコトーンにおいて採取活動が行われていた。落葉広葉樹林帯に位置し、比較的多く自然植生が残る岩手県沢内村では、氾濫や雪圧などの自然攪乱によって生じた一次的エコトーンと、林業に伴う植生攪乱によって生じた二次的エコトーンを使い分けた採取活動が行われていた。以上の結果に基づいて以下の3点について考察を行った。1) エコトーン的重要性：山菜採りは農山村周辺の自然環境のごく一部にすぎない特定のエコトーンに依拠している。2) 攪乱の重要性とエコトーンの多様性：エコトーンは自然または人間による攪乱によって成立する場所であり、その攪乱の質や頻度によって異なる様々な環境が作り出されている。このことによって人は採取地を選択する余地を得ていると考えられる。3) 山菜文化のゆくえ：エコトーンの成り立ちを見れば、人間活動が関与しているが山菜は人の意思とは無関係に自然に生育するものであり、山菜資源の変化にたいして積極的な行動がとられることがない。このことは山菜文化が自然環境の変化によって移ろいやすい文化であることと、環境多様性が野生生物を利用する地域文化に対して持つ意義を示唆している。

## ①……………序論

### 1 はじめに

日本で広く見られる自然物採取活動のひとつに山菜採りがある。近代化以降、稈、落葉、灌木、薪炭材など、林野における採取活動が次々と姿を消す中で、山菜採りは農山村に暮らす人々の日常に根強く残っている。自然と人間の関係の再考の必要性が叫ばれている昨今、自然と直接関わって形成される文化のあり方と意義を実証的に検討するうえで興味深い活動である。山菜の利用を見ると、東北地方山村においてゼンマイが江戸時代以降に商品として山村の大きな収入源となる〔池谷1989a〕など、山菜が販売用として重要な山の資源となることもある。しかし、採取された山菜は自給的に自家用、贈答用に用いられることが多く、こういった利用の仕方は経済的にはさほど大きな価値を持たないが、地域特有の食文化の形成や、人と人の交流の媒体として寄与するなど、現代的にも大きな意味を持つものと考えられる。筆者は昔の言うように、山菜採りは「深い遊び」として、活動それ自体の経済性や生産性以外に何らかの意味を持つ〔菅1998〕活動と考える。

本稿ではこの山菜採りを題材として、環境利用システムを考えてみたい。農山村における自然環境は攪乱・遷移の影響によって、自然林、2次林、草地、水辺がモザイク状に分布し、様々な環境が存在することが指摘されている〔鷺谷1999・2001、広木2002〕。それでは、このように多様な環境を持つ農山村において、山菜はいったいどんなところで採られているのだろうか。これを本研究をおこなうにあたっての問題の端緒として、より具体的な課題の設定のために議論を進めていこう。

一般に山菜と称される植物はワラビ、フキ、ゼンマイなど、草本植物が圧倒的に多い。わずかであるが、タラノメ、サンショウなど木本植物の若芽等が山菜として利用される。山菜となる木本植物は特に陽樹と呼ばれる。草本植物や陽樹は、林冠が開け陽光が多くさし込むような場所（ギャップ）を好んで生育場所とする。すなわち山菜の採取はこういった場所において行われる可能性が高いであろう。このような植生の遷移過程にある場所は、生態学的にはエコトーン（生態学的移行帯）とみなせる。そこで、本稿では山菜採りによる土地利用を解釈する上で、エコトーンに着目する。以下にエコトーンについて定義と過去の研究を簡単にレビューしたうえで、本稿の意義と課題を述べる。

### 2 エコトーンの定義と先行研究

Ecotoneという言葉じたいは1930年代には使われていたとされるが、<sup>(1)</sup>初めて学問的立場からエコトーンの定義を行ったのは景観生態学のdiCastriら（1988）であり、これを引用する文献は多い〔diCastri F., Hansen, A.J. 1992, Calow, P. ed. 1998 など〕。以下にdiCastriらの原文を転載する。

“zone of transition between adjacent ecological systems, having a set of characteristics uniquely defined by space and time scales, and by the strength of the interactions between adjacent ecological systems.”〔diCastriら。1988〕

すなわち、エコトーンとは隣接する生態系間の移行地帯で、空間的・時間的スケールおよび互いに隣接する生態系同士の相互作用の強弱によって独自の特徴をもつ空間である。エコトーンは人為的攪乱によって生じる [diCatri, F., Hansen, A. J. 1992, Lepart, J. and Debussche, M. 1992, Heliölä, J. ら. 2001, Molles, M. C. 2002, Godefroid, S. and Koedam, N. 2003 など] ことも多く、のちにエコトーンの定義も積極的に人為的攪乱の要素を盛り込み、次のような説明が加わる。「通常、自然界では陸域と水域の会おう場などが好例であるが、人為的な介入や攪乱によって森林を開墾してできる農耕地の周辺にも見られる」 [Petren, M. 2001 [秋道訳 2001]]。さらに、秋道 (2001) はエコトーンを、自然状態で生じる一次のエコトーン (primary ecotone) と人為的攪乱によって生じる二次のエコトーン (secondary ecotone) に区分した。農山村周辺の自然環境に即していうならば、前者は河川および沢沿いの林冠開放地などにあたり、後者は農耕地周辺、森林伐採跡地などがあたる。

以上がエコトーンの定義についてであるが、エコトーンをめぐってどのような研究がなされてきたのであろうか。当初、エコトーンは気候変動が自然環境に与える影響や水辺の植生が水質に与える影響を見る立場から着目されてきた [Risser 2002] が、近年特に着目されているのが、生物多様性を保全する立場 (保全生態学や景観生態学) である。エコトーンは、境界の両側に生息する生物が混在することと、優先種が欠落することで生育可能になる生物が存在することで生物多様性が高くなるとされる [Calow, P. ed. 1998, 巖佐ほか編 2003]。そのため、エコトーンは多様な生物の生息場所として重要であり、生物多様性の保全や資源管理について議論する上で重要な概念となっている [Holland, M. ら. eds. 1991, Hansen, A. J. ら. 1992, 秋道 2001 など]。エコトーンという語は使われないものの、わが国の保全生態学や景観生態学が里山に着目する [鷲谷 1999, 武内ほか編 2001, 広木 2002 など] のも同様の動きであろう。

多くの生物種がエコトーンに依存して生きていること、エコトーンにおいて生物多様性が高いことは多くの研究によって実証されている。例えば、植物についてはGodefroid, S. and Koedam, N. (2003), 甲虫についてはAyzama (2003), 小型哺乳類についてはWilliams, S. E. and Marsh, H. (1998) が挙げられる。日本の里山は、人間活動によって植生が遷移途中にあるエコトーンとみなすことができ、ここで保全すべき種として植物ではカタクリ、昆虫ではオオムラサキ、魚類ではメダカなどが例に挙げられる。ここで言及される生物は、人間の生業活動や文化との関係についての具体的な議論が無いままにその保全の必要性が主張されてきた。

エコトーンにおいて生物多様性が高いということは、当然ながら、人がそこから得る恵みが多いことを示唆する。野中・池口 (2002) は、一次のエコトーン・二次のエコトーンの区分にしたがって、ベトナム北部で行われる複合的生業を整理し、エコトーンが生業活動を展開する場として重要であることを示した。しかしながら、このようなエコトーンと人間活動の関わりを論じた研究は筆者の知る限りではほかに見当たらない。エコトーンにおいてどのような生物が存在し、その生物の存在の上に人間の生業活動がいかに展開されているか、その実例を示すことは意義深いことであると考えられる。

### 3 本稿の課題および方法

本稿は山菜採りという採取活動が、どのような場所で展開されるのか、エコトーンに着目して山菜採り活動の環境利用システムについての考察を試みる。すなわち、山菜の採取地はエコトーンであるのか、エコトーンである場合は、一次のエコトーンであるのか二次のエコトーンであるのか、そしてそれぞれのエコトーンはどのようにして成立しているのかを明らかにすることを課題とする。

本稿では、山菜採りに利用される場所の実例をより広く捉え、かつおのおの実例を相対化するため、タイプの異なる二つの事例を取り上げる。ひとつは近畿地方の兵庫県旧篠山町であり、もうひとつは東北地方の岩手県沢内村である。両地域は豊富な森林を有する（森林率75～80%）が、前者は気候的に照葉樹林地帯に位置し、圧倒的に二次植生が優勢する地域であり、後者は気候的に落葉広葉樹林地帯に位置し、比較的自然植生が多く存在する地域である。

本稿で取り扱う2地域において、2001年7月から8月にかけて、筆者はそれぞれ20戸の家庭を対象に山菜採りおよび山菜利用の実態について聞き取り調査を行った。以後、2004年6月まで数回訪問し、聞き取り調査と参与観察を行った。2004年春の山菜採りのシーズンには、篠山で3名、沢内で2名の方から採取記録を得ることができた。記録された採取行について採取地や採取方法を確かめるために、GPSを携帯し同行、もしくは後日実地にての再現をしてもらった。これが不可能な場合については、聞き取り調査によって地形図上に場所を同定する方法を採った。また、2001年から2004年まで、集落周辺および森林内の踏査を適宜行った。また2004年には、必要に応じて10m四方のコドラート（植生調査を行う際にサンプルとして設置する調査区域）での植生調査を行った。

ところで、もともと「山菜」という属性を持った植物は存在しない。本論に移る前に、本稿で取り扱う「山菜」について定義づけを行なわなければならない。これは同じような植物が分布しているにもかかわらず、地域によって利用される山菜の種類が異なることがあるためである。すなわち、ある植物はある地域で山菜とされるが、ほかのある地域では、存在するにも関わらず山菜とされないことがあるのである。その地域において何が山菜であるのかは、周辺に存在する植物を独自に価値付けているその地域の文化によって規定されるものだろう。そして、その文化は自然条件や社会的条件が歴史的に作用して形成されてきたものであろう。山菜とは、その地域において歴史的に山菜として価値を与えられてきた植物であると言える。そこで、本稿でいう「山菜」は、それぞれの地域にある可食植物のうち、村人が「山菜」として認識しているものをさすこととする。ただし、自然物の採取活動を扱う本稿では、林野や農耕地に植栽されたものは扱わない。

## ②……………篠山の場合—二次的エコトーンに展開される山菜採り

### 1 調査地の概要

兵庫県旧多紀郡篠山町（以下、篠山と呼ぶ。）は1999年に同郡の旧今田町、旧丹南町、旧西紀町と合併して現在は篠山市となっている。



図1 兵庫県における旧篠山町の位置

篠山は丹波山地を流れる篠山川周辺に開けた農村で、東部は京都府と接する（図1）。南北に14km、東西に20km、約187km<sup>2</sup>の広がりを持つ。最高峰の御嶽（793m）をはじめ、周囲を600m前後の山に囲まれている。もっとも標高の低い篠山川沿いで約200mであるから、垂直方向の広がりとしては、約600mあることになる。

気候は太平洋型の内陸気候であり、寒暖の差は大きく、降水量はやや少ない。篠山市消防本部調べによる1998年から2000年までの平均気温は12.5℃で、平均降水量は1,462mmである（篠山市ホームページ）。

合併前の1990年世界農林業センサスによると、人口は約22,000人で、農家林家率は85%となっている。農業は水稻耕作と特産の黒大豆やヤマノイモなどの生産が盛んである。古くから兼業の盛んな地域であり、近世期から丹波杜氏として冬の出稼ぎが盛んであったことはよく知られている。

森林率は76%で、うち人工林率は26%となっている（1990年世界農林業センサス）。人工林はヒノキが大部分である。スギは谷筋のごく限られた範囲に植栽されているに過ぎない。聞き取りによると、篠山の森林土壌は礫質で痩せており、ヒノキが地味に合っているためであるという。

当地域の植生の概要を見るために、環境庁による植生図を図2に示した。全域がヤブツバキクラス域植生に属するが、自然植生は無視できるほどに少ない。地域の大部分が代替植生のアカマツーモチツツジ群落で、谷部を中心に人工林化が進んでいる。集落周辺の低地は水田雑草植生となっている〔環境庁1974〕。

森林の大部分を占めるのはアカマツーモチツツジ群落であるが、聞き取りによると、昭和30年代までは薪炭林および農用林として使われていた森林である。薪炭林としては、コナラやアベマキが多い下部の林分が適しており、20～30年サイクルで皆伐されていた。村人の自家用のみならず、業者への売却も行われていた。焚き付けとして使うアカマツの枯葉の採取も行われ、これは「コキバカキ」と呼ばれていた。農業用としては、シバ刈りが行われ、宅地に併設されていた灰小屋で焼かれ、農地に肥料として投入された。シバ刈りはおよそ4～5年のサイクルで行われていた。現在は何の手入れもされないため、遷移が進みアカマツに代わってソヨゴ、アラカシなどの常緑樹が勢力を増してきており、モチツツジもほぼ姿を消してしまっているのが現状である（2001～2004年調査）。

## 2 採取される山菜の種類

まず、篠山でどのような山菜が採られているか見ておく。タケノコ（モウソウチク、マダケ、ハチ

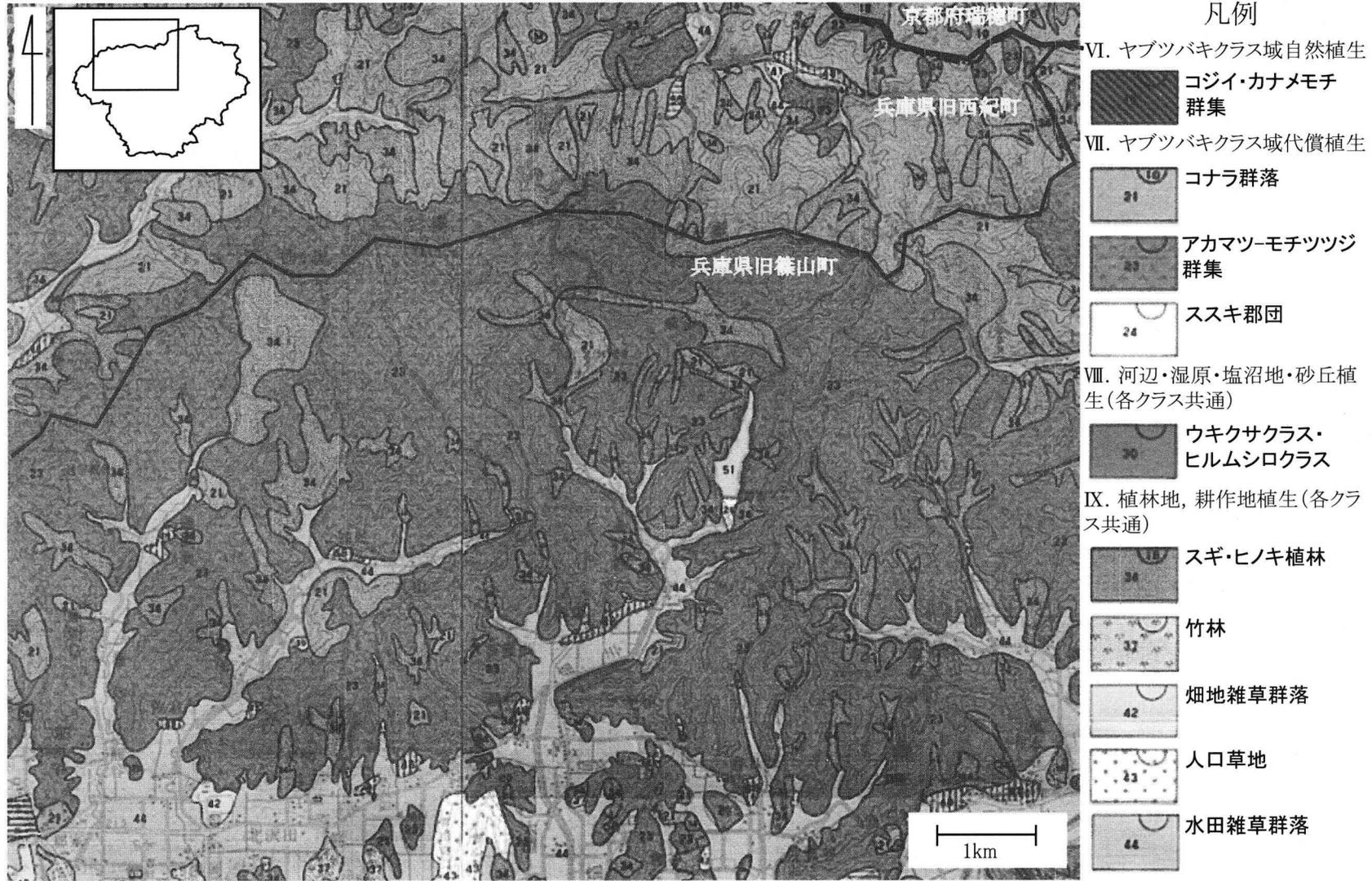


図2 篠山の植生図

出典) 環境庁発行の『第3回自然環境保全基礎調査 現存植生図』の「園部」と「篠山」を合成した上で一部抜粋。

表1 篠山における調査世帯の概況と山菜採取実績

世帯番号	家族構成	採取した山菜
A 1	<b>F68</b> , M45, F39, 子 6, 子 3	フキ, ゼンマイ, タラノメ, ミツバ
A 2	F82, M58, <b>F55</b> , F28	フキ, ワラビ, ミツバ
A 3	M72, <b>F69</b> , M39, F36, 子12, 子 9	フキ, ワラビ, ミツバ
A 4	M76, F77, M48, <b>F48</b>	フキ, サンショウ, ミツバ
A 5	F93, <b>M71</b> , F68, M32	フキ, ミツバ, ツクシ
A 6	F87	なし
A 7	F88, M61, <b>F60</b> , M31	フキ, ミツバ
A 8	<b>M78</b> , <b>F75</b> , M48	フキ, ミツバ
A 9	<b>M66</b> , <b>F63</b> , M40	フキ, ワラビ, サンショウ, ミツバ, ヨモギ
A10	M70, <b>F66</b>	フキ, ワラビ, サンショウ, ミツバ
B 1	<b>F79</b> , M56, <b>F50</b> , F27, M22, F21	フキ, ミツバ
B 2	<b>M72</b> , F67	サンショウ, ミツバ
B 3	M75, <b>F72</b> , F46, M39, 子13, 子11	フキ, ワラビ, ミツバ
B 4	<b>M75</b> , F70, <b>M45</b> , F43, 子19, 子19, 子13	フキ, ミツバ
B 5	M67, <b>F67</b> , M40	フキ, ワラビ, ゼンマイ, フキノトウ, タラノメ, セリ
B 6	M63, <b>F58</b>	フキ, ワラビ, タラノメ, ミツバ
B 7	<b>M60</b> , F59, M30	フキ, ワラビ, タラノメ, セリ, ミツバ, ヨモギ
B 8	M75, <b>F71</b> , M49, <b>F46</b> , F13	フキ, ウド, ユキノシタ, タラノメ, ノビル, セリ, ミツバ, ツクシ, コンフリー
B 9	<b>M70</b>	フキ, ワラビ, ミツバ
B10	<b>M81</b> , <b>F75</b> , M51, F51, 子23	フキ, サンショウ

資料：2001年聞き取り調査より作成

注：データはすべて2001年調査時のもの。山菜採りに従事する者は太字で示した。

Mは男性、Fは女性を示す。M、Fまたは「子」の右の数字は年齢を表す。

山菜の標準和名、学名については付表を参考。

クを混称)は一般的に採取されるものであるが、明らかに植栽されたものであるので、本稿の考察対象から除いておく。2001年にA集落とB集落の各10戸、計20戸の家庭において採取される山菜の種類を明らかにした結果を表1に示す。20戸中19戸の家庭で採取が行われ、平均採取種数は3.2種となる(以下に述べる例外的家庭B8家を除外して算出)。採取する家庭の多い順に述べると、フキ、ミツバ、ワラビ、タラノメ、サンショウの順となり、すべて多年生草本および陽樹である。

フキは篠山では最も一般的かつ好まれる山菜である。篠山の山菜を代表するものである。葉柄のみを利用する。皮をむく場合が多いが、若くて小さい場合は皮をむかずそのまま調理される。調理法はすべて佃煮である。佃煮にすると、冷蔵庫で1～3ヶ月の間食べられるとされる。

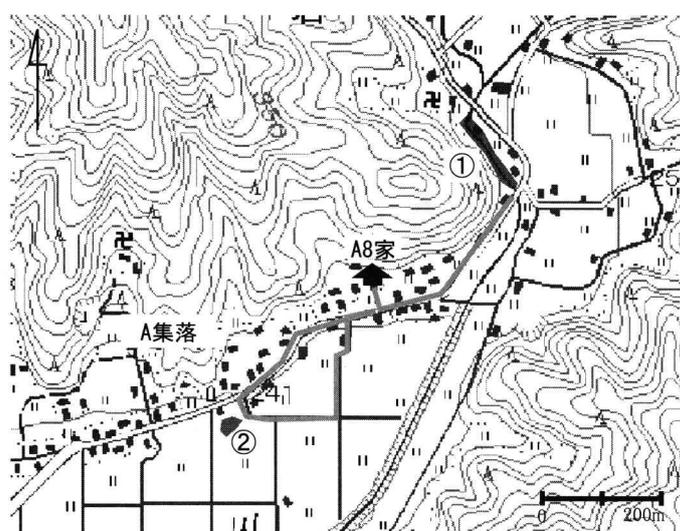
ミツバは多くの家庭で採取されるが、味噌汁などの薬味としての利用が主で、ごく少量しか採取されていない。

ワラビはかつてどこの家でも採られていたが、20年ほど前に「ワラビを食べると癌になる」という噂が流れてから、採らなくなった家庭が多い。全草を重曹の入った熱湯につけてアク抜きして

から、煮物にする。

サンショウは花、実、若葉が食用とされる。もともと自生のものを利用していましたが、現在は植栽したアサクラサンショウを利用することが多い。調理法は佃煮である。表中には自生のサンショウから花、実、若葉を採取している場合のみを取り上げた。

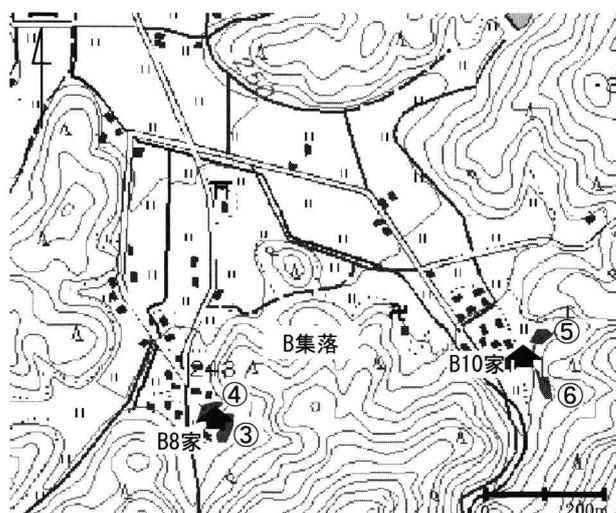
タラノメは、この地域では最近になって食べるようになったという。ツクシ、セリ、ミョウガはごく一部の家庭で利用される。また、例外的な家庭としてB8家がある。表中の46歳女性（F46）によって採取される山菜は明らかに他の家庭と異なる。彼女は夫の転勤に伴い、北海道、青森などで生活した経験を持ち、そこで様々な山菜を採取し食べる楽しみを知ったという。彼女の義母（F71）によっても山菜採りは行われるが、F71の採る種類は他の家庭と同様のものである。



凡例  
 採取地  
 車、徒歩での移動

A8家採取記録

採取日	所用時間	山菜の種類	場所	道のり
4月20日	1時間	フキ	①用水路脇	400m
			②田の畦	400m



B8家採取記録

採取日	所用時間	山菜の種類	場所	道のり
3月10日頃	30分	フキノトウ	③家の裏の草地	50m未満
3月25日頃	30分	フキノトウ	③家の裏の草地	50m未満
4月26日	3、4時間	サンショウ	③家の裏の山すそ	50m未満
5月8日	3時間	フキ	④家の前の川土手	50m未満
5月22日	3時間	フキ	③家の裏の草地	50m未満
5月23日	3、4時間	サンショウ	③家の裏の山すそ	50m未満
			④家の前の川土手	50m未満

B10家採取記録

採取日	所用時間	山菜の種類	場所	道のり
4月20日	20分	ワラビ	⑤家の裏の山すそ	50m
5月21日	30分	フキ	⑥田の畦	50m未満

図3 篠山における山菜採取地  
 国土地理院・「地図閲覧サービス ウォッチーズ」(<http://watchizu.gsi.go.jp/>)を使用

### 3 山菜採りの行われる場所

2004年春に得られたA8家、B8家(表1中のF71による採取のみ対象)、B10家の山菜採取記録から採取地の配置を見ると、採取地は自宅のごく近辺に位置している(図3)。そこは森林ではなく、家の裏、田の畦、林縁、水路脇などの草地であった。大別して1)山林から離れた草地(田の畦など)と、2)山林に近接した草地(ヤマスソ、ワチ)に類別できる。のちに詳述するように、篠山で山菜はすべてこのような宅地および農地に近接した草地で採取される。A8家の4月20日フキ採りの事例は上に挙げた2タイプの採取地を含んでおり、ここではこの事例を挙げる。

#### A8家のフキ採りの事例

4月20日午前8時半、車で約400m離れた水路(図3中の①)へ向かい、道路わきへ車を停める。南北に流れる水路の両側にそれぞれ1~3mほどにわたって草地が広がるが、西側は山林となっている。ここのフキは群生しておらず、かつ、ほかの草にまぎれていて採るのはたいへんだが、長くて良いものが採れるという。ここのフキをとり終えると、車で700mほど離れたA8家所有の田(減反のため転作中)へ向かう(図3中の②)。この畦にフキの群生があるが、そこに行くまでに点在するフキを採集しながら向かう。群生地は採りやすいが、貧弱な個体も多いので良いものを選んで丁寧採る。こうして2地点で計約1kgのフキを採り、車に乗って9時半ころに帰宅した。

記録には表1に見られるミツバやタラノメなどはないが、2001年および2004年の聞き取り調査結果によって補うと、以下ようになる。

#### (1) 山林から離れた草地：田の畦など

田の畦はフキの群生地があり、フキの採取地として最も主要な場所であるが、貧弱な個体も多いので良いものだけ選んで採取が行われる。ワラビが生えることもあるが、痩せているのでここでは採れない。篠山においては一般的に利用される山菜ではないが、ツクシ、ヨモギなどは田の畦において広域的な群落を形成している。同じく一般的ではないが、セリも田の畦の下部の、水面に近いところにある。

#### (2) 山林に近接した草地：ヤマスソ、ワチ

山林と野の境は一般に「ヤマスソ」と呼ばれる。特に水田と山林の境界は「ワチ」と呼ばれ、幅5m前後にわたって草地が広がっている。こうした場所にはワラビの群生地があり、ワラビの採取地として最も主要な場所になっている。ミツバもよく生えているので、使う都度に採取される。山林にごく隣接した林縁部ではサンショウやタラノメが採取される。

このほかの、ごく一部の家庭で採取される山菜もすべて草地もしくは林縁部で採られていた。その背景に、「山の中に山菜はない」という、多くの人に共通した認識があった。また、このことが事実であることは林内の踏査によって容易に確かめられた。一例として集落近くのアカマツ二次林

表2 篠山の二次林における植生調査結果

DBH 5 cm以上高木			樹高1 m以上中層木		
樹種	学名	DBH(cm)	樹種	学名	個体数
アカマツ	<i>Pinus densiflora</i>	27	コバノミツバツツジ	<i>Rhododendron reticulatum</i>	24
アカマツ	<i>Pinus densiflora</i>	26	ヒサカキ	<i>Eurya japonica</i>	13
アカマツ	<i>Pinus densiflora</i>	26	ネジキ	<i>Lyonia ovalifolia</i>	12
アカマツ	<i>Pinus densiflora</i>	20	ヤブツバキ	<i>Camellia japonica</i>	6
アカマツ	<i>Pinus densiflora</i>	19	アセビ	<i>Pieris japonica</i>	5
アカマツ	<i>Pinus densiflora</i>	19	ヤマツツジ	<i>Phododendoron obtusum</i>	3
アカマツ	<i>Pinus densiflora</i>	17	ソヨゴ	<i>Ilex pedunculosa</i>	3
アカマツ	<i>Pinus densiflora</i>	8	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i>	2
ソヨゴ	<i>Ilex pedunculosa</i>	8	リョウブ	<i>Clethra barvinervis</i>	2
ソヨゴ	<i>Ilex pedunculosa</i>	7	サカキ	<i>Cleyera japonica</i>	1
ソヨゴ	<i>Ilex pedunculosa</i>	7	ホオノキ	<i>Magnolia obovata</i>	1
ソヨゴ	<i>Ilex pedunculosa</i>	7			
ソヨゴ	<i>Ilex pedunculosa</i>	6	草本層 (稚樹を含む)		
ソヨゴ	<i>Ilex pedunculosa</i>	6	コドラート名, 種名	学名	個体数
ソヨゴ	<i>Ilex pedunculosa</i>	6	A		
ソヨゴ	<i>Ilex pedunculosa</i>	5	*ウスノキ	<i>Vaccinium hirtum</i> var.	5
ソヨゴ	<i>Ilex pedunculosa</i>	5	*ヒサカキ	<i>Eurya japonica</i>	2
ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i>	16	シシガシラ	<i>Blechnum nipponicum</i>	1
ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i>	9	*サカキ	<i>Cleyera japonica</i>	1
ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i>	8	B		
ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i>	7	*コバノミツバツツジ	<i>Rhododendron reticulatum</i>	5
ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i>	6	*ウスノキ	<i>Vaccinium hirtum</i> var.	3
サカキ	<i>Cleyera japonica</i>	7	*ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i>	2
ネジキ	<i>Lyonia ovalifolia</i>	6	*ミツバアケビ	<i>Akebia trifoliata</i>	2
リョウブ	<i>Clethra barvinervis</i>	5	サルトリイバラ	<i>Smilax china</i>	1
			C		
			*ウスノキ	<i>Vaccinium hirtum</i> var.	8
			*ヒサカキ	<i>Eurya japonica</i>	7
			*ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i>	3
			*ヤマウルシ	<i>Rhus trichocarpa</i>	1
			*ミツバアケビ	<i>Akebia trifoliata</i>	1

調査地の基礎情報 (2004年6月5日実施)

位置: 北緯 35°06'08.1" / 東経 135°15'47.5" / 標高 310 m

斜面: 西向き, 勾配 40%

注) 草本層は10m四方コドラート内に1m四方のコドラートを3つ設け、個体数を数えた。通常草本層は被度であらわすが、山菜の場合は個体数が重要となると考え、個体数で表している。なお草本層の\*は木本植物であることを示す。

において行った10m四方コドラートでの植生調査の結果を表2に示す。林内には草本層が極めて少ない。篠山は76%と広範に森林が分布するが、そこは山菜の採取地となりえず、わずかに林縁部が利用されるのみである。すなわち、山菜は「山」で採られるものではなく、むしろ「野」で採られるものなのである。

以上をまとめると、篠山の山菜採取地は草地、林縁部にかぎられ、その中で目的物の有無、質の良し悪しによって採取地が選択されている。

#### 4 採取適地の成立要因

篠山における山菜採りは、宅地や農地の近隣の草地および林縁部で展開されていた。こうした場所は、人の手がいえることによって遷移の初期段階にとどまっている二次的エコトーンとみなすことができる。それでは、こうした場所にはどのような、そしてどの程度の人為的攪乱があるのだろうか。

聞き取り調査によると、山菜採取地のうち、もっとも人為介入の頻度が高いのは田の畦である。田の畦は年に5回程度の草刈りが行われ、時によって枯れ草が燃やされる。頻繁に草刈りをする理由として、虫の繁殖を抑え、草によるイネの被陰を防ぐことが挙げられる。枯れ草を燃やすのは、枯葉が腐植化することによって畦の土壌が軟弱化するのを防ぐためである。

宅地裏のヤマスソは、草刈りの頻度は年に1回である。この草刈りは、草が茂って歩きにくくなることと、樹木が茂ることを防ぐために行われる。ワチの草刈りは特にワチガリと呼ばれ、年に1回程度行われる。この草刈りも田の畦と同様の理由で行われる。ワチの林縁部は水田の陰になる林木がある場合、カゲギリと呼ばれる除伐が行われる。隣接する水田と山林の所有者は異なることが多いため、カゲギリを実行するか否かは、集落の決定にゆだねられている。役員が毎年ワチを歩き、水田の影になっている林木がないかチェックし、除伐すべき木があった場合は、集落の総会で同意を得た上でカゲギリを実行する。こうして、1ヶ所につき数年に1回のカゲギリが行われている。

篠山で利用される草本性の山菜はすべて宿根性の多年草であり、このような攪乱に適応しているものと思われる。また陽樹のサンショウやタラノキについても、これらが林縁や伐採跡地を好むことは一般に知られており、このような攪乱に適応しているものと思われる。

このように、篠山において山菜採りが行われる場所は、定期的で頻繁な人為介入によって、遷移の初期段階にとどめられている二次的エコトーンであり、このような場所こそ篠山の人々が山菜採りをする時に利用価値の高い場所なのである。

### ③……………沢内の場合——一次的エコトーンと二次的エコトーンの使い分け

#### 1 調査地の概要

沢内村は岩手県西端、奥羽山脈の一角に位置し（図4）、村の中央を南流する和賀川の両岸には緩やかに平坦な土地が開け、ここに集落が点在している。村は南北に28km、東西に10km、面積286km<sup>2</sup>の広がりを持つ。和賀岳（1,440m）をはじめ、東西を1,000メー

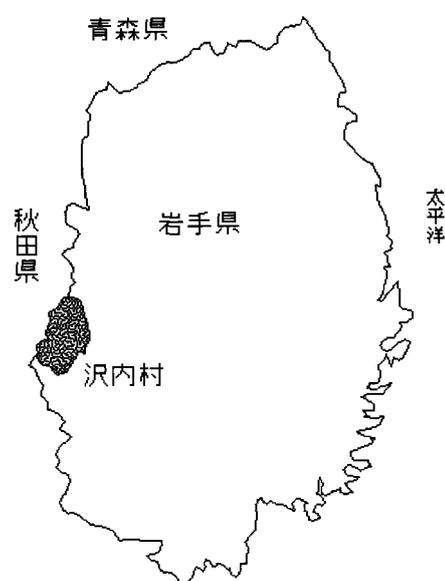


図4 岩手県における沢内村の位置

トル前後の山々に囲まれている。集落の標高は約250mから400mであるから、垂直方向の広がり  
は、最大約1,200mあることになる。

気候は1年を通して冷涼である。日本海側型の気候であり、冬季の降水量が多く、最大積雪深は  
2m前後になる（沢内村企画調整課2001）。沢内測候所における1979年から2000年までの年平均  
気温は8.6℃で、平均降水量は2,426mmである（気象庁ホームページ「電子閲覧室」）。

2004年6月現在の人口は約4,000人（沢内村ホームページ）で、農家林家率は93%となってい  
る（2000年世界農林業センサス）。農業は水田稲作が主力であるが、近年はリンドウを中心とした  
花卉類の生産が盛んになってきている。

森林率は80%で、うち国有林が80%をしめている（2000年世界農林業センサス）。かつては国  
有林の木材生産活動や林木払い下げも活発であったため、林業に携わる人も多かった。しかし、現  
在はこの林業不振の中、国有林の林業生産は縮小し、林業従事者は激減している。人工林率は  
41%（2000年世界農林業センサス）となっており、植栽樹種はスギ・カラマツである。

当地域の植生の概要を見るため、環境庁による植生図を示した（図5）。標高約1,000m以上の  
亜高山地帯を除くと、全域がブナクラス域植生に属する。集落近辺の森林は代替植生のクリーミズ  
ナラ群落やコナラ群落と人工造林地で占められる。その外側に自然植生であるブナ・チシマザサ群  
落が広く分布する。集落周辺の低地は水田雑草植生および畑地雑草植生となっている（環境庁  
1979）。

沢内ではおよそ3割の家庭で薪が利用されており（沢内村2004）、現在も薪炭林が存在する。薪  
は集落の共有林や、国有林の薪炭共用林野において採取されている。一部、近隣の町から購入して  
いる場合もある（2004年聞き取り調査による）。

多くの農山村の例に漏れず、人工造林地の大部分は昭和30年代以降に行われたもので、聞き取  
り調査によると、植林が行われる前はカヤ山や草刈山、薪炭林だったという。

## 2 採取される山菜の種類

まず、沢内でどのような山菜が採られているか見ておく。2001年にX集落とY集落の各10戸、  
計20戸の家庭において採取される山菜の種類を表3に示す。20戸中18戸で採取が行われており、  
平均採取種数は8.2種である。採取する家庭の多い順に述べると、ワラビ、フキ（アキタブキ）、  
ミズ（ウワバミソウ）、アザミ（サワアザミ）、ボンナ（ヨブスマソウ）、ゼンマイ、シドケ（モミ  
ジガサ）、ウド、コゴミ（クサソテツ）、の順となる。沢内には多種多様な山菜が生育するが、各家  
庭で採取可能な範囲で、それぞれの好みになうものだけが採取される。これらはすべて宿根性の  
多年生草本もしくは陽樹である。以下に、これまでの聞き取り結果を総合して、それぞれの山菜の  
利用状況について説明する。

ワラビは最も多くの家庭で採られ、好まれる山菜である。穂先を取り除き、重曹を入れた熱湯に  
つけてアク抜きをしてから食用とする。多くの家庭で塩漬け保存され、消費量も多い。多い家庭で  
は50kgものワラビが保存される。採ってすぐに食べる場合はお浸し、保存したものを食べる場合  
は煮物が多いようである。

凡例

- I. 高山帯自然植生
  - 高山ハイデ及び風衝草原
  - 雪田草原
- II. 亜寒帯, 亜高山帯自然植生
  - ウラジロヨウラクミヤマナラ群団
  - チシマザサ自然草原
- IV. ブナクラス域自然植生
  - チシマザサ-ブナ群団
  - ヒメヤシヤブシ-タニウツギ群落
- V. ブナクラス域代償植生
  - クリ-ミズナラ群落
- VII. ヤブツバキクラス域代償植生
  - コナラ群落
- IX. 植林地, 耕作地植生(各クラス共通)
  - アカマツ植林
  - スギ・ヒノキ植林
  - カラマツ植林
  - 畑地雑草群落
  - 人口草地
  - 水田雑草群落

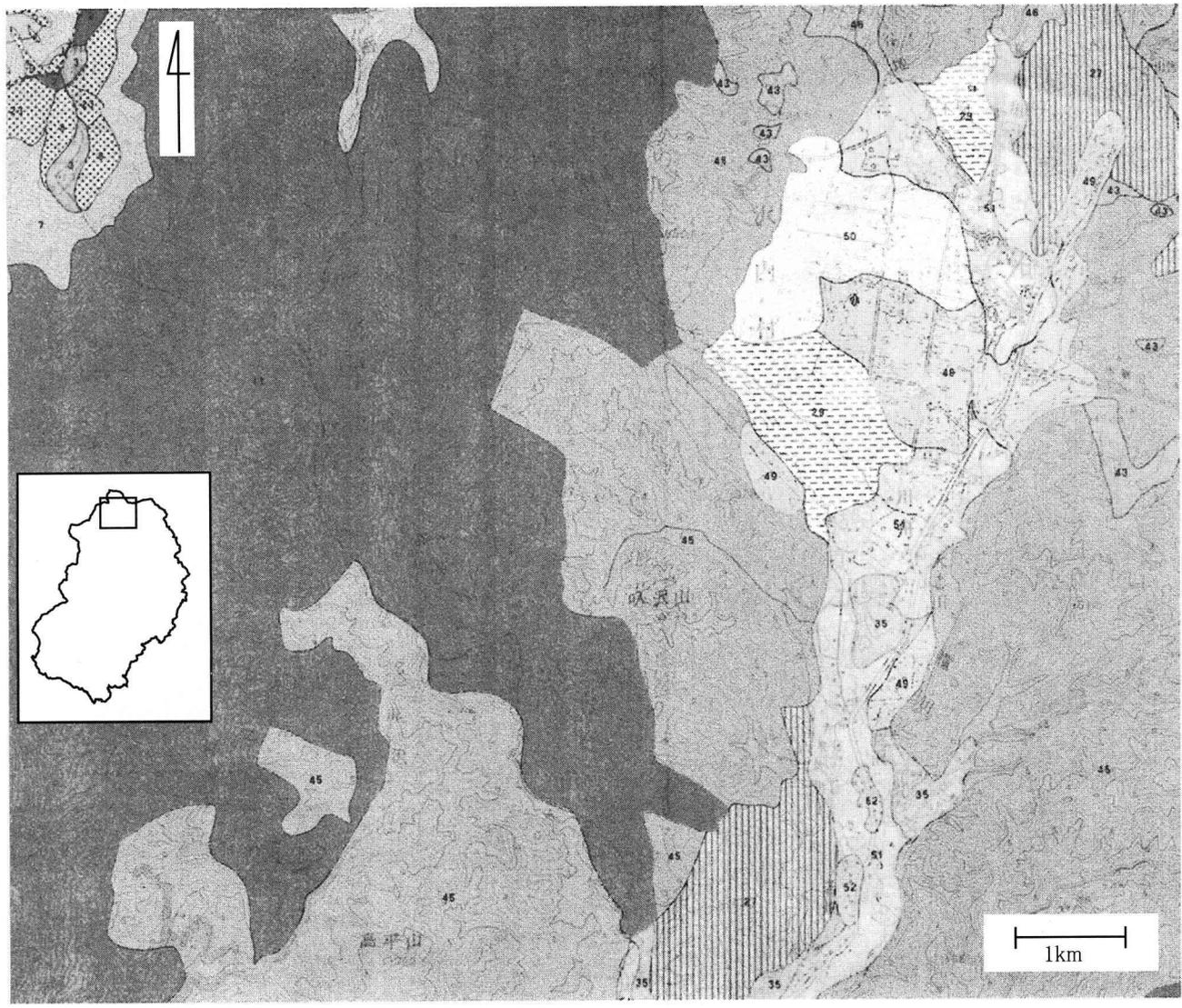


図5 沢内の植生図

出典) 環境庁発行の『第2回自然環境保全基礎調査 現存植生図』の「鶯宿」を一部抜粋。

表3 沢内における調査世帯の概況と山菜採取実績

世帯番号	家族構成	採取した山菜
X 1	<i>M68</i> , <i>F54</i> , F27	フキ, ワラビ, ゼンマイ, ウド, アザミ, シドケ, ミズ
X 2	<i>M64</i> , <i>F62</i> , M41, M40, 子10, 子7, 子4	ワラビ, ウド, コゴミ, シドケ, ウルイ, ボンナ, ミズ, タケノコ, アザミ, ヒロッコ
X 3	<i>M69</i> , M43, F35, 子4	バツケ
X 4	M82, F71, M54, <i>F50</i> , M18	フキ, ワラビ, ゼンマイ, ウド, ミズ, ボンナ, アザミ, タラボ, ヒロッコ, ギョウジャニンニク
X 5	F75, <i>M49</i> , <i>F45</i>	フキ, ワラビ, ゼンマイ, ウド, シドケ, ミズ, ボンナ, タラボ
X 6	M77, <i>F76</i> , M55, <i>F49</i> , M26, F24	フキ, ワラビ, ゼンマイ, シドケ, ウルイ, ミズ, アザミ
X 7	<i>F55</i> , M49	フキ, ワラビ, コゴミ, ミズ, アザミ, タラボ
X 8	<i>M71</i> , <i>F68</i> , M44, F34, 子10, 子8	バツケ, ワラビ, ゼンマイ, ボンナ, アザミ, タラボ, ヒデコ
X 9	M76, M52	なし
X10	<i>F60</i> , M57, M33	フキ, ワラビ, ヒロッコ
Y 1	M80, F77, <i>M54</i> , F49, M42, M24	フキ, ワラビ, ウド, コゴミ, シドケ, ウルイ, ミズ
Y 2	M69, <i>F67</i> , M46, F42, 子16	フキ, ワラビ, ウド, シドケ, アザミ, ボンナ, ウルイ, ミズ, アイコ, ギョウジャニンニク, ヒデコ, タケノコ, ワサビ, タラボ, サク, コサバラ
Y 3	M75, <i>F73</i> , <i>M5?</i> , F5?, M25, F28	フキ, ワラビ, ウド, アザミ, シドケ, ミズ, アイコ, ウルイ, タラボ
Y 4	<i>M70</i> , <i>F62</i> , M39, F30, 子7, 子4	フキ, ワラビ, ウド, シドケ, アザミ, ボンナ, ウルイ, ミズ, タケノコ, タラボ, サク
Y 5	<i>M72</i> , F66, M42, F40, 子15	フキ, ワラビ, ゼンマイ, アザミ, ボンナ, コゴミ, ミズ, アイコ, ワサビ, サク
Y 6	<i>M72</i> , F68, M45, F41, 子9	フキ, ワラビ, ゼンマイ, コゴミ, シドケ, アザミ, ボンナ, ミズ, ヒロッコ
Y 7	F98, M80, <i>M53</i> , F51, 子12	フキ, ワラビ, シドケ, ミズ
Y 8	<i>M65</i> , F60, M34, F34, 子7, 子3	フキ, ワラビ, ゼンマイ, ウド, コゴミ, シドケ, ウルイ, アザミ, タケノコ, アイコ, ミズ, ボンナ, ワサビ, タラボ, サク
Y 9	F65, <i>M44</i> , F38, 子11, 子5	フキ, ワラビ, コゴミ
Y10	M75, F73, M54, F51, 子28	なし

資料：2001年聞き取り調査より作成

注：データはすべて2001年調査時のもの。山菜採りに従事する者は太字で示した。

Mは男性, Fは女性を示す。M, Fまたは「子」の右の数字は年齢を表す。

山菜の標準和名, 学名については付表を参考。

フキも多くの家庭で採られる山菜である。葉柄の部分茹で皮をむいてから食用とする。これも塩漬け保存される山菜であり、多い家庭で30kgほどが保存される。料理の仕方としては、煮物が多いようである。

ミズは容易に採れる山菜として多くの家庭で親しまれている。8月から9月まで採取・利用できる

る。畑や家の庭に植栽されることも多いが、たいていの場合、山で採ったものを利用する。葉を取り除き、茹でて皮をむいたものを食用とする。味噌汁の具や煮物とされる。主に当座利用で、保存する家庭は少ない。近隣の家庭へのおすそわけも行われている。

アザミは1年のもっとも早い時期に賞味される山菜のひとつである。若い個体を採取し、全草を食用とする。主に当座利用で、保存する家庭は少ない。

ボンナは香りがよく、好まれる山菜である。葉はしごきとって茎だけを利用する。料理法はお浸しが多いようである。主に当座用で、保存する家庭は少ない。

ゼンマイは採取と加工に最も手間がかかるが、好まれている山菜のひとつである。すべて乾燥加工、保存される。先端の綿毛を取り除いたのち茹でて、筵に広げ、1日5回ほど水分を揉み出しながら天日乾燥する。食べる都度、水で戻して煮物に利用される。自家用にされるほか、離れて暮らす親族や近隣の家庭などにおすそ分けされる。この地でもかつては乾燥ゼンマイ生産が重要な現金収入源となっていたが、現在ではごく一部の人が販売するのみで、多くは自家用と贈答用となっている。

シドケは当地で最も好まれる山菜である。これが多く採れると自慢できるそうである。全草を茹でてお浸しにして賞味される。保存には向かないとされ、一部の例外を除きすべて当座利用される。自家用にされるほか、離れて暮らす親族や近隣の家庭などにおすそ分けされる。一部に、無人販売所や産地直売所で販売する人もいる。

ウドは植栽したものも利用されるが、表3には自生のものを採取したものだけ取り上げた。一般に植栽したものの方が香りは弱いとされ、自生のものとどちらが好まれるかは人によって異なる。主に茎を食用とする。多くの家庭で塩漬け保存されるが、保存する場合は1m近くに成長したものを利用する。多い家庭では30kg保存される。当座の場合は茹でて酢味噌和えや煮物、保存したものを利用する場合は煮物が多いようである。

コゴミももっとも早い時期に賞味される山菜のひとつである。10~15cmに伸びたものを利用する。茹でてあぶら(エゴマ)和えなどとするほかは、冷凍保存される。

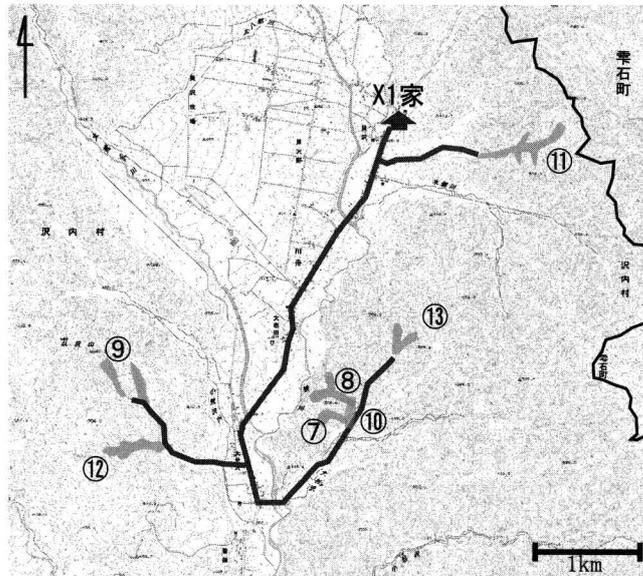
ウルイ(オオバギボウシ)は植栽したものも利用されるが、表3には自生のものだけ取り上げた。好みや資源量の問題から、採取されることの少ない山菜としては、タケノコ(チシマザサ)、アイコ(ミヤマイラクサ)、ワサビがある。

かつてはよく採取していたが、近年採取されなくなってきたものとして、ヒデコ(シオデ)、ヒロッコ(ノビル)がある。ヒデコが採取されなくなった理由については不明であるが、ヒロッコは水田の土地改良をしたのちに採れなくなったのだという。

近年採取されるようになったものとして、タラボ(タラノメ)、サク(エゾニュー)、ギョウジャンニク、コサバラ(コシアブラ)がある。これらは町の人や秋田県側の村人がやって来て採るのを見て、もしくは教わって採取するようになったものである。

### 3 山菜採りの行われる場所

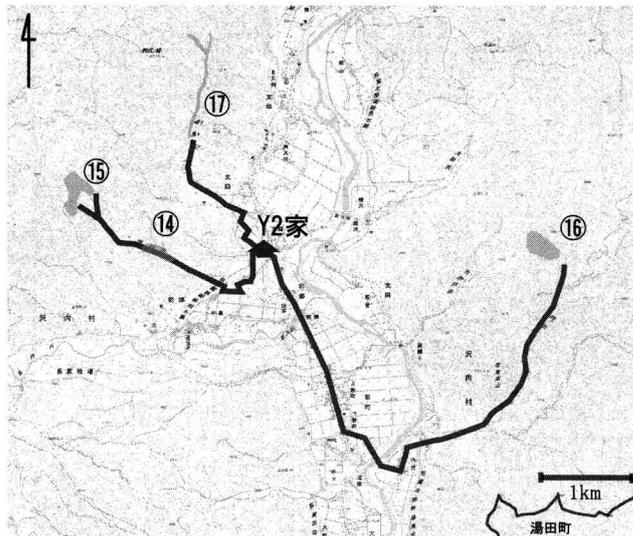
2004年春に得られたX1家、Y2家の山菜採取記録から採取地の配置を見ると、採取地は自宅



凡例

X1氏採取記録

採取日	所用時間	種類	場所	道のり
5月7日	3時間半	ゼンマイ	⑦薪炭材伐採跡地の斜面	約6km
5月11日	3時間	ゼンマイ	⑧沢沿い	約6km
		シドケ	⑨沢沿い	
5月12日	4時間半	ゼンマイ	⑦薪炭材伐採跡地の斜面	約6km
		シドケ	⑧沢沿い	
		ボンナ タラボ	⑩林道沿いの若い造林地	
5月13日	6時間	ゼンマイ シドケ ウルイ	⑨沢沿い	約6km
5月14日	2時間半	ゼンマイ シドケ	⑪沢沿い, 伐採跡地斜面	約1km
5月15日 (午前)	3時間半	ゼンマイ シドケ ウド	⑫沢沿い	約5km
5月15日 (午後)	2時間半	ゼンマイ シドケ ボンナ	⑬沢沿い	約7km



Y2氏採取記録

採取日	所用時間	種類	場所	道のり
5月21日	2時間	コゴミ	⑭沢沿い	約2km
		シドケ タラボ	⑮若い造林地	
5月22日	2時間	フラビ	⑮若い造林地	約3km
5月24日	3時間	フラビ	⑯若い造林地	約8km
6月10日	1時間半	ミス	⑰沢沿い	約2km
6月15日	2時間	ミス	⑭沢沿い	約2km

図6 沢内における山菜採取地  
 国土地理院・「地図閲覧サービス ウォッチズ」(<http://watchizu.gsi.go.jp/>) を使用

から離れた山林内に位置する(図6)。これらの採取地は、1) 沢沿い、2) 伐採跡地、3) 若い造林地に大別される。ここではX1氏の5月12日、Y2氏の5月12日の山菜採り事例を挙げる。

X1氏の5月12日の山菜採りの事例。

この日の目的はゼンマイとシドケである。車で家を出る。県道、林道を走り、目的地付近の林道

脇に停車する。ここまで約 6 kmの道のりである。停車地付近は樹高 2～3 mのスギ人工林（図 6 中の⑩）。その林内に点在するタラボがちょうど採取適期を迎えていた。「昔は食べなかったが、よその人が食べるのを見て 10 年ほど前から食べるようになった」といい、道すがら手に届く範囲のものを採る。見渡せばたくさんあったが、それらには目もくれず、本来の目的地までのルートをとる。ここには型の小さいシドケもあったが、「ずいぶん立派なシドケだな」とあざ笑って採ろうとはしない。人工林が途切れて、岩の上をちよろちよろと水の流れる沢を登る。途中点在するゼンマイを採取する。ゼンマイは太いオンナゼンマイ（ゼンマイの栄養葉）だけを選んで採る。やがて左手に明るく開けた斜面が現れた。ここが氏の今回の本命の場所である（図 6 中の⑦）。氏の推測によると、7 年ほど前に薪を切り出したところだという。氏は「木を伐って 3 年位するといいゼンマイが出るようになる。年月がたってシバが茂ってくると、やがてなくなってしまふ。ここもだいたいシバが茂ってきた。」と語る。斜面上方にシバが多く、樹高 1～3 mのホオノキ、ノリウツギ、ミズナラ、ハウチワカエデ、タラノキなどが茂っている。本来は、ゼンマイを採るにはもっと奥の山へ行って、雪崩が毎年起きるような急斜面で採るものだが、体を悪くしてからこういう採りやすいところで採っているのだという。

この場所で一通り採り終えると、採取物を整理してショイコに入れ、一服したのち、別の沢へ旧作業道を伝って移動。今度は伐採されていない沢沿いである（図 6 中の⑧）。沢の両岸はタニウツギなどの低木が生える斜面で光が良く差し込んでいる。沢沿いにシドケが点在、斜面にゼンマイがある。氏はもっぱらゼンマイを採取した。しばらく沢を下がると左手から別の沢が合流する。「左の沢にはシドケがある」といって、ショイコはここに置き、コダシだけで左の沢へ向かう。沢の水が途切れるあたりにところどころ岩がむき出しになった斜面が広がる。樹木はほとんどない。一帯に茎の太いシドケが群生している。コダシに効率よく入るように整理しながら採取していく。なるべく太いものを選んで採る。採り終えて、帰途に着くべく沢を下りながら、点在するシドケ、ウドを採る。林道へ出て停車した場所まで歩き、この日の採取行は終わる。

#### Y 2 氏の 5 月 22 日の山菜採りの事例

この日の目的はワラビである。車で家を出る。農道、林道を走り、目的地付近で林道は途切れる。ここまでの道のりは約 3 kmである。停車したその場所から採取地が広がる（図 6 中の⑮）。ここは若いスギの人工林であり、樹高は 3～4 mで疎植のためか林冠が広く開いている。この一帯は 15～20 年前に、集落の数人が国有林から林地の払い下げを受けて、それぞれに植林をおこなった所である。明るすぎず暗すぎず、このような適度の光の当たるところに良いワラビが出るという。一帯のワラビを 1 時間強かけて採取し 7 kgのワラビを採取して帰途についた。

記録にあらわれていないが、聞き取りによって、上述した 3 分類のほかに篠山と同様、4) 農耕地周辺の草地があることがわかっている。ただし、のちに述べるように、利用頻度はあまり高くない。4 つに分類した山菜採取地、すなわち沢沿い、伐採跡地、若い造林地、農耕地周辺の草地について、聞き取りを及び観察結果をもとに以下に説明する。

### (1) 沢治い

「山菜はみな沢治いにある」といわれるほど、沢治いは山菜採りにとって重要な場所である。沢内における山菜採取地の大部分がこのタイプである。フキ、ミズ、アザミ、シドケ、ボンナ、ウド、コゴミ、ウルイなど、沢治いを歩くことによってワラビ以外の山菜はほぼすべての山菜を採ることができる。そして、彼らが良質とする山菜の採れる場所でもある。フキは田の畦にもあるが、沢に生えるものは太くてうまそうに見えるという。フキは皮をむいてから大量に保存されるが、大きい方が皮をむきやすい、身がしっかりしていて溶けにくいというのも利点である。

一口に沢治いといっても、植生や地形は小面積的に多様に存在しており、採取適地は山菜の種類によって異なる。例えば、沢の源頭部の雪圧によって肥沃な土壌が深く堆積していて明るい疎林下では太くて良いシドケが大量に採れる。シドケはX1氏の事例に見られるように、造林地や普通の沢治いにも生えるが、個体が貧弱で群生していないのでこういった場所は採取地として好まれない。沢に面する急斜面は毎年大量の雪がずれ落ちるため、樹木はあったとしてもヒメヤシャブシやタニウツギなどの匍匐性の低木類しかないが、太くて良いゼンマイが生える。このタイプのゼンマイの採取地に関しては池谷(1989b)に詳しく、沢内の場合とほぼ事情は変わらないので詳しくはこちらを参照されたい。沢内ではゼンマイは造林地などにも生えるが、細くて良いものではない。このように地形その他の条件によって異なる環境と山菜の種類や生育状況の間には、一定の傾向があるが、実際には条件に合っている場所でも全く無かったり、近年中に何者かに採取され、株がやせていて好条件ではないことがある。むしろ採取行を計画する際に重要となるのは、どこの沢のどの部分に何がどのような生え方をしているのかについての、個別の知識である。人によっては秋などに偵察のための山行、もしくはキノコ採り道中での山菜発生状況の見定めが行われている。あらかじめ個別の場所の知識を持ったうえで、天候の推移を勘案してその日の採取地を決めているのである。

### (2) 伐採跡地

沢内の人で伐採跡地を山菜の採取地として利用する人は少数派であるが、X1氏のように体力的な事情から積極的に伐採跡地を利用することもある。先に挙げた事例に即していえば、X1氏は採取が容易で質の良いものが採れるという理由で採取地⑦を選択していた。実際にX1氏は5月12日に図6中の⑩において山菜採りを行っているが、採取地⑩の中には伐採跡地も含まれており、ここではゼンマイのほかにシドケを採った。タラボもこのような場所に多い。これも沢治い同様、伐採跡地であればすべて良いというわけではなく、ゼンマイは斜面が急な方がいいなど、一定の傾向はあるものの、採取適地がどこにあるかは個別に知っていなければならない。

### (3) 若い造林地

ワラビを採る人の大部分は若い造林地で採取を行う。集落近辺の農耕地の周辺でもワラビは豊富に採ることができるにもかかわらず、わざわざ集落から離れた造林地にも足を運ぶ。農耕地周辺のワラビは「ノッコ(野っこ)ワラビ」と呼ばれるのに対し、彼らが好んで採るワラビは「ヒカゲ(日陰)ワラビ」と呼ばれる。前者に対して、後者は太くて長く粘りがあっておいしい、という彼らが

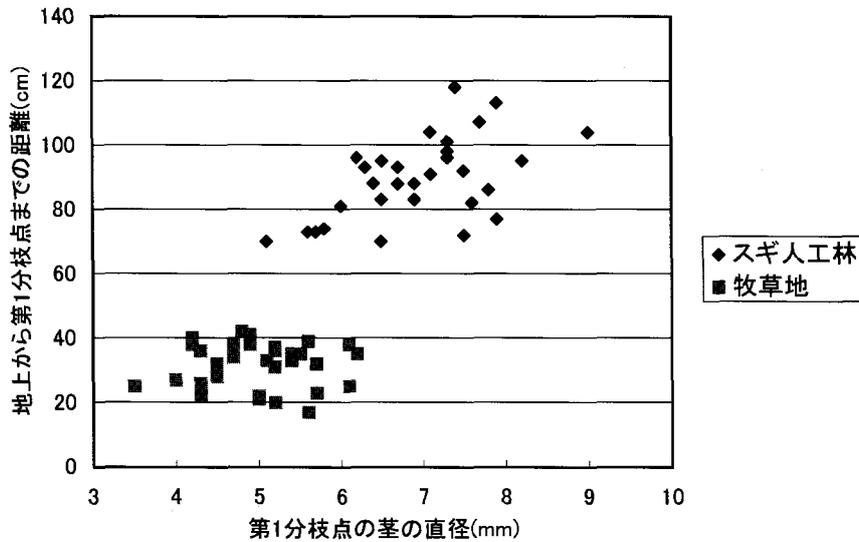


図7 若い人工林と牧草地のワラビの個体サイズ比較

好む形質を備えている。ノッコワラビとヒカゲワラビについて形状を計測したところ、図7に示すような差が見られた。比較的斜度の緩い若い造林地では、植林してから20年くらいまでこのような良いワラビを採ることができるというが、これも、どこの造林地にどのようなワラビが生えるかについて個別の知識が必要である。

若い造林地でワラビを採るようになったのは比較的最近のことである。人工林率は1960年で8%、1970年で20%、1980年で34%となっており（世界農林業センサス）、かつてはそれほど造林地自体が多くなかった。造林地が増える前は、ワラビはカヤ山、草刈山の中で採っていた。草刈山は全面草本植生というわけではなく、上木がまばらに生えている山であったという。また古い炭窯のあるところ、すなわち炭材が採取されたあとに成立した森林にも良いワラビが出たという。このような土地の大部分は造林地に転換されたか、植生遷移の進行により消失してしまった。

かつてワラビが生えていて造林地が変わったところは、林齢が若いうちだけワラビが採れるのである。「スギが大きくなればワラビが採れなくなってしまう」という嘆きも聞かれる。

ヒデコもワラビと同じようなところで採るという。前述したように、ヒデコを採る人は少なくなっているが、理由は不明である。

#### (4) 農耕地周辺の草地

農耕地の周辺は、最も草本植生が発達している。フキ、ワラビ、コゴミなど多くの山菜が見られるが、前述のように彼らの求める質に合わないため、こういった環境の山菜が採られることは少ない。フキは田の畦のものもおいしいが、小さくて皮をむくのが面倒なのと、塩漬け保存すると溶けてしまうため、当座用として少量利用するに限られる。ワラビは、牧草地などが何年も放置されて荒野化したところで採取されている事例があった。

農耕地周辺に特有の山菜としてヒロッコがある。かつてヒロッコは、畑の脇などに多く自生して

いたという。しかし、水田の土地改良が行われたのちは、ほとんど見かけることができなくなった。

また、当地の人びとには、集落近辺に生える山菜に対して、良いイメージを持っていない。例えば、里に生えるものは雑草であるとか、路傍に生えるものは汚いという感覚を持っている。そのため、集落近辺で山菜を採る場合でも、なるべく人や動物の通らないところ、人の手が入らないところを選んで採取地としている。逆に、山のものはきれいだが、山のものはうまい、山菜は人手を嫌う、といったような山地の山菜に対する肯定的な感覚がある。

このように、沢内では篠山とは対照的に、里地ではなく山地で山菜を採ることが一般的である。採取記録の移動距離に見られるように、彼らの行動範囲は広範だが、採取地は沢沿い、伐採跡地、若い造林地に限られる。これらのほかにも、亜高山植生、自然林の尾根部・斜面、成熟した人工林など多様な環境があるが、踏査の結果、これらの環境では山菜はほとんど見られなかった。一例として当地の山林内にもっとも広範に分布すると思われるブナ林斜面部にておこなった、10m四方コドラートでの植生調査の結果を表4に示す。篠山の林内地上同様、そもそも林床は草本植生に乏しいのである。

以上をまとめると次のようになる。沢内の山菜採取地の多くは山地に求められるが、山地における山菜採取地は、おおむね沢沿い、伐採跡地、若い造林地に限られ、その中で山菜の発生状況に

表4 沢内の天然林における植生調査結果

DBH 5 cm以上高木			草本層 (稚樹を含む)		
樹種	学名	DBH(cm)	コドラート名, 種名	学名	個体数
ブナ	<i>Fagus crenata</i>	73	A		
ブナ	<i>Fagus crenata</i>	67	ナルコユリ	<i>Polygonatum falcatum</i>	7
ブナ	<i>Fagus crenata</i>	34	*オオカメノキ	<i>Viburnum furcatum</i>	2
ブナ	<i>Fagus crenata</i>	30	*ヒメアオキ	<i>Aucuba japonica</i> var.	3
			ヤマソテツ	<i>Plagiogyria matsumureana</i>	1
			*ブナ	<i>Fagus crenata</i>	1
			B		
			*ヒメアオキ	<i>Aucuba japonica</i> var.	5
			タケシマラン	<i>Streptopus streptopoides</i> var.	2
			*コシアブラ	<i>Acanthopanax sciadophylloides</i>	1
			*ブナ	<i>Fagus crenata</i>	2
			*ヒメモチ	<i>Ilex leucoclada</i>	1
			スゲ属	<i>Carex</i> spp.	1
			*ヤブコウジ	<i>Ardisia japonica</i>	1
			C		
			ツクバネソウ	<i>Paris tetraphylla</i>	9
			*ブナ	<i>Fagus crenata</i>	6
			マイヅルソウ	<i>Maianthemum dilatatum</i>	5
			チシマザサ	<i>Sasa kurilensis</i>	5

調査地の基礎情報 (2004年5月18日実施)

位置: 北緯 39° 35' 18.8" / 東経 140° 49' 00.2" / 標高 740 m

斜面: 南東向き, 勾配 50%

注: 草本層は10m四方コドラート内に1m四方のコドラートを3つ設け、個体数を数えた。通常草本層は被度であらわすが、山菜の場合は個体数が重要となると考え、個体数で表している。なお草本層の\*は木本植物であることを示す。

---

よって採取地が選択されている。彼らが山菜とする植物の中で潜在的に里地に特有のものはほとんどないが、山菜の質や発生環境が彼らの好みに合う時に採取地となる。

#### 4 採取適地の成立要因

##### (1) 沢沿い

沢沿いは、林冠が開放もしくは疎開している一次のエコトーンである。光が比較的良く差し込むために山菜に限らず草本類が繁茂している。一般に溪畔林は水位の上昇、すなわち氾濫や冠水によって攪乱を受けている。これに加え、沢内の場合には雪圧もまた攪乱の要素となっている。谷地形には風が運び込む雪と斜面上方からの雪のずれ落ちによって、雪が堆積する。そのため、沢沿いの斜面は多大な雪圧と積雪グライドの影響によって、高木は存在しない。さらに、雪崩が頻発する雪食地では、多年生草本が占めるようになる [小野寺 2002]。このように自然の攪乱を受ける場所は、宿根性の多年生草本の山菜が生育しており、少なくとも 1 年に 1 度は訪れる攪乱によって半永久的な山菜の採取適地となっている。

##### (2) 伐採跡地

筆者が確認しえた採取適地となる伐採跡地は、国有林内に設定された薪炭共用林野であった。なお、現在はほとんど行われていないが、かつて国有林の天然林は拡大造林を行うために盛んに伐採されていた。薪炭共用林野は集落単位で国と契約して設定され、1 林分あたりの伐期はおよそ 60 年であるという。皆伐された林分は放置される。皆伐されて林床の光条件がよくなると、草本類や陽樹が茂る。遷移が進行し樹木が林冠を閉鎖しはじめると、草本類や陽樹は被陰され徐々に消滅して行く。伐採後 3 年から 10 年が採取地として適する期間である。一時的ではあるが沢沿いに類似した環境が成立する。ここは人が森林を皆伐したことによって成立している二次のエコトーンであるが、頻繁な攪乱がないために、遷移の初期段階のみに採取適地となっている。

##### (3) 若い造林地

ワラビ採取に適する若い造林地はかつて、カヤ山や草刈り山などの、もともとワラビの生えていた山林であった。カヤ山や草刈り山は定期的に人の手によって攪乱されてきた二次のエコトーンである。このような場所では定期的な攪乱があるため、半永久的な採取適地であったと思われる。やがてそのような山林は拡大造林の対象となり、スギの人工林に転換されていった。ワラビは地下茎の発達した多年草であるため、スギが植えられただけでは絶えることはない。スギ人工林も林齢が若いうちは林冠が閉鎖しないため、ワラビの生育に適した環境が維持される。ただ、20 年もの長い間ワラビが採取可能であるのは、当地でのスギの植林が極めて疎植であるのと、雪害によるスギの損傷があるためと考えられる。しかしながら、いずれは林冠が閉鎖し、ワラビの生育には適さなくなる。

#### (4) 農耕地周辺の草地

山菜採取地としてはごく少数派である農耕地周辺の草地であるが、田の畦は篠山同様1年に5回ほどの草刈りが行われる二次的エコトーンである。何年も人手が入らず荒野化している草地もあるが、こういったところもかつては定期的に人為的な攪乱のあった二次的エコトーンと考えられる。

沢内の山菜採取地は、集落から離れた山地に求められるが、そこは何らかの攪乱をうけたエコトーンであり、このような場所が沢内の山菜採りをする人びとにとって利用価値の高い場所なのである。そして、山菜の種類や体力的な事情によって一次的エコトーンと二次的エコトーンは使い分けられている。

### ④……………考察

山菜の採取地をめぐって近畿地方の農山村・篠山と東北地方の農山村・沢内の事例を見たが、ここでは両事例を包括的に捉える観点に立って考察を進めたい。

#### 1 エコトーンの重要性

両事例において山菜採り活動がすべてエコトーンに展開されることが明らかとなった。これは山菜とされる植物の生物学的特性に起因する。山菜は草本や陽樹であるから、植生遷移の初期段階に生育する。そのため、山菜採取活動はエコトーンにしか成り立ち得ない。エコトーンが存在は山菜採りが成り立つ上での必要条件となっている。

山菜採取地として利用されるエコトーンは人々が必要とする山菜の分布状況によって選択される。篠山では集落周辺の二次的エコトーンが重要である。沢内では一次的エコトーン、二次的エコトーンともに山地に立地していることが重要である。これら山菜の採取地として利用されるエコトーンは、地域の自然環境全体のごく一部に過ぎないが、人々が山菜を日常生活に利用し、生活を営んでいくうえで大きな役割を持つ場所なのである。

#### 2 攪乱の重要性とエコトーンの多様性

山菜採取活動の場となっているのは、人々が求める条件にあったエコトーンである。山菜の採取地となるエコトーンの性質を決定付けるものとして攪乱の存在が考えられる。

第一に、攪乱があることが重要である。一次的エコトーンも二次的エコトーンもなんらかの攪乱の上に成立している。攪乱が初期的な遷移段階の植生を生み出しているからである。また、山菜の殆どが多年性の草本、すなわち宿根性であるために他の植物に比べて、攪乱を受ける環境により適応していると考えられる。

そして、採取適地となるためには攪乱の程度も重要である。篠山の場合、極言すればこの地域の自然環境はほぼすべてが二次的エコトーンと捉えることができるが、山菜の採取適地となるのは、

表5 山菜採取地となるエコトーンにおける植生攪乱の内容と頻度

	山菜採取地	一次のエコトーン		二次のエコトーン		
		攪乱の内容 攪乱の頻度			ワチ (森林側) カゲギリ 数年に 1回	ワチ (草地側) 草刈 年1回
沢 内	山菜採取地	沢沿い	伐採跡地	若齢人工林	農地周辺草地	
	攪乱の内容 攪乱の頻度	氾濫, 積雪グライド 1回/年~	皆伐 ~数十年に 1度	皆伐/下刈 ~数年 1回	草刈 年1~5回	

資料：2004年聞き取り調査を基に筆者作成。

頻繁に、もしくは定期的に草刈り・除伐の人為的攪乱が行われる集落周辺の草地のみである(表5)。これは頻繁な人為的攪乱によって、山菜にとって良好な生育環境が生み出されているためと考えられる。

沢内の人々が好む個体サイズの大きい山菜は、農耕地周辺の頻繁な攪乱を受ける場所には生育しない。また、沢内の人々には、人の入らない場所、より自然に近いものを好む傾向がある。そのため、一次のエコトーン、人為的攪乱の頻度の低い二次のエコトーンの両方が採取地として選択されていると考えられる(表5)。

当然ながら一次のエコトーンと二次のエコトーンは攪乱の質が異なり、攪乱の結果実現される環境も異なる。さらに、二次のエコトーンは攪乱の程度によって、質の異なる環境が実現される。すなわち攪乱の質や程度によって、多様な環境が生み出される。このような環境の多様性はホイッターの定義した $\beta$ 多様性<sup>(2)</sup>に相当する。 $\beta$ 多様性が低ければ、山菜採取地の選択の幅が少なくなったり、なくなる可能性もある。仮に、篠山において草刈りが行われなかった場合、人々が採取地として選択すべき草地自体がなくなるというようなことも考えられるであろう。エコトーンは地域環境に多様性に影響を与える。特に二次のエコトーンは攪乱の頻度によって異なる様相を示す。鷲谷(2001)も指摘するように、生物多様性や資源管理を考える上で重要な示唆を与えるものである。

### 3 山菜文化のゆくえ

序章に触れたように、人間の生活がどのような環境のどのような生物の存在の上に成り立っているか、というのは重要な問題と考える。日本における山菜採りにとって、エコトーンが重要であることはいままで述べたとおりである。では、このエコトーンが存在の上に成り立つ山菜採り、山菜文化がどのようなものなのか、いま一度エコトーンの成り立ちを吟味しながら考えてみたい。

篠山の採取適地は定期的な草刈りや除伐によって維持されている。この因果関係を見る限り、山菜は人の手によって作られているという見方もできる。しかし、これは決して山菜を得ようとして行われている作業ではない。山菜が生育するエコトーンを維持する草刈りや除伐は、稲作を行ううえ

で必要な作業として行なわれている、安室の言う「稲作の論理」[安室1989]で行われる作業である。篠山の山菜採りは、環境利用システムとしてみた時、稲作をめぐる諸活動を通して結果的に生み出された自然環境において、自然に生育してきた植物を利用する行為と捉えることができる。

沢内のもっとも主要な採取適地である沢沿いは、自然のサイクルによって訪れる氾濫や積雪グラインドによって維持されている。この点に関して言えば、沢沿いで行なわれる山菜採りは、完全に自然のサイクルによって成立している環境を利用している。山地における二次的エコトーンは、皆伐という人為的攪乱を受ける。篠山の二次的エコトーンと同様に、ここでも山菜を得ようとして行なわれている作業ではない。この皆伐は、薪炭材生産や育成林業という、いわば「林業の論理」で行われる作業である。伐採跡地で行なわれる山菜採りは、林業を目的とした活動によって成立した自然環境に結果的に生育してきた植物を利用する環境利用システムとして捉えることができる。

このように、山菜採りの環境利用システムとは、無為もしくは山菜採り以外の生業を目的とした活動の結果生み出されたエコトーンを採取の場として利用することである。エコトーンに生育する山菜は、人の意思に関係なく「自然」に生えているものである。人々が山菜を獲得するためには、山菜を育てるのではなく、人々の採取地選択論理に見られるように、どこにどのような山菜があるか知っていることが重要なのである。「育てない」こと背景には、自然に生えるという安心感もあるのではないだろうか。篠山で主要な山菜であるフキも、いちど季節の味として味わってしまえば、他の雑草と一緒に刈り払われてしまう。この、山菜をあくまでも自然の産物として捉える感覚があるために、人は山菜の消長に無頓着である。沢内のヒロッコは土地改良にともなってほぼ姿を消してしまったが、その現実にも誰も抗おうとしない。ヒロッコは当地の人々にとって有益であるにもかかわらず、積極的な保護をしようとされないのである。このように山菜とはその価値を顧みられにくい存在である。この、自然物と捉えられているがゆえにその産物の価値が顧みられにくいという事情は、山菜採りに限らず他の自然物採取活動にも共通するものと考えられる。例えば、水田稲作の近代化によって田や水路の魚貝類が消滅したことに対して、村人の抵抗がなかったことはその一例だろう。

これまでのわずかばかりの調査を踏まえて、筆者は山菜に対する知識、採取行動、利用法、好みなど民俗の総体を山菜文化と定義してみたい。環境が変化し、山菜の発生状況が変化したとき、人々はその変化に抵抗しようとはせず、ただその変化を受け入れる。その時、山菜を利用する山菜文化も変わらざるを得ないのである。環境の変化をただ受容するがゆえに、移ろいやすいのが山菜文化なのである。

日本では近世期まで、草山での草刈、薪炭材採取など農業、林業、生活資材獲得目的とした多様な活動があったが、明治以降、段階的にこのような山との関わり方は消失してきた。この過程で起こるのは人間が山林を放置したことによる植生遷移の進行であり、それぞれの活動によって形成されてきた特有の自然環境も単一化されていくのである。いわば日本は環境多様性が減少するという環境変化を経験しているのである。山菜採り、もしくはその他自然物採取によって成り立つ地域の文化は、急速な環境変化に対して抵抗力の弱いものである。人間が自然に関わることによって生じてきた環境多様性の減少は、野生生物だけでなく、それを採取・利用することによって形成されてきた文化や社会関係に大きな影響を与えるものとして捉えられるのである。

## 〔謝辞〕

本稿を作成するに当たって多くの方のご協力、ご指導をいただきました。

調査地である篠山と沢内の皆様には、2001年の突然の訪問から長きにわたって、調査活動を受け入れてくださったばかりか、時には親身になって付き合ってください、このことが研究を続ける上での大きな励みになりました。篠山の北村純江氏は篠山地方のことについて何も知らぬ筆者に、文献や食文化に関する情報を与えてくださり、2004年の調査日程の調整に苦慮している時に様々な便宜をはかってくださいました。このような調査地の皆様のご支援なくしては研究の継続は不可能でした。

兵庫県自然環境保全課の松田友美子氏、沢内村雪国文化研究所の小野寺聡氏には資料を提供いただき、有益な情報と助言をいただきました。

また、国立歴史民俗博物館「環境利用システムの多様性と生活世界」研究会、コモンズ研究会 (URL: <http://freett.com/commons/>)、総合地球環境学研究所研究室5および研究室7でのゼミ、京都大学大学院農学研究科森林・人間関係学研究室のゼミにおける皆様のご指摘、ご指導が多いに参考となりました。そして、国立歴史民俗博物館の篠原徹先生、総合地球環境学研究所の秋道智彌先生、野中健一先生、西村雄一郎先生、指導教官である京都大学大学院農学研究科の岩井吉彌先生には、個人的にご助言、ご指導、励ましの言葉をいただきました。

すべての方の名前を挙げることはできませんでしたが、お世話になった皆様にこの場を借りて深くお礼を申し上げます。

## 註

- (1)——1930年代には一部地域の主に野生生物管理者によって実践的な使用がなされ、アルド・レオポルドが例に挙げられる [Risser 2002]。多様性とは、1ハビタット内で実現される生物多様性で、 $\beta$ 多様性は異なるハビタットの集合によって実現される多様性、 $\gamma$ 多様性とはさらに大きな単位の地域の集合によって実現される多様性と理解できる。
- (2)——ホイタッカーは生物多様性を見る上での指標として $\alpha$ 多様性、 $\beta$ 多様性、 $\gamma$ 多様性を定義した。 $\alpha$

## 参考文献

- 秋道智彌 2001 「アジア・モンスーン地域におけるエコトーン研究の展望—ベトナム北部クワンニン省の事例を中心に—」『鯨：魚がむすぶ琵琶湖と田んぼ 琵琶湖博物館5周年記念企画展・第9回企画展示解説書』滋賀県立琵琶湖博物館：155-160
- 池谷和信 1989 a 「東北地方の奥地山村におけるゼンマイ生産地域の形成—明治後期から大正期における奥地山村の商品経済化の一類型として—」人文地理。第41巻第1号：71-75
- 1989 b 「多雪地帯の山村におけるゼンマイ採集活動と採集ナワバリ」季刊人類学。第20巻第1号：63-127
- 巖佐庸・松本忠夫・菊沢喜八郎・日本生態学会編 2003 『生態学辞典』共立出版：35
- 岩手県環境保健部自然保護課 1979 植生調査報告書(岩手県)『第2回自然環境保全基礎調査』環境庁
- 小野寺弘道 2002 「積雪挙動と広葉樹の分布特性」梶本卓也・大丸裕武・杉田久志編著『雪山の生態学』東海大学出版会：43-54
- 環境庁 不明 篤宿『第2回自然環境保全基礎調査 現存植生図』環境庁
- 不明 新町『第2回自然環境保全基礎調査 現存植生図』環境庁
- 1985 園部『第3回自然環境保全基礎調査 現存植生図』環境庁

- 1985 篠山「第3回自然環境保全基礎調査 現存植生図」環境庁
- 沢内村 2004 『沢内村森林バイオマス利用促進行動計画—煙突の見える村あったか沢内—』沢内村
- 沢内村企画調整課 2001 『沢内村の統計』沢内村
- 菅 豊 1998 「深い遊び—マイナー・サブシステムの伝承論」『現代民俗学の視点1 民俗の技術』朝倉書店：217-246
- 瀬川 強 2000 沢内村動植物調査のまとめ 3-1。植物，雪国の文化。第11集 沢内村雪国文化研究所：2-42
- 農林水産省統計調査部 1961 『1960年世界農林業センサス』農林統計協会
- 1972 『1970年世界農林業センサス』農林統計協会
- 農林水産省経済局統計情報部 1981 『1980年世界農林業センサス』農林統計協会
- 農林水産省大臣官房統計情報部 1992 『1990年世界農林業センサス』農林統計協会
- 2002 『2000年世界農林業センサス』農林統計協会
- 武内和彦 1991 『地域の生態学』朝倉書店
- 武内和彦・鷺谷いづみ・恒川篤史編 2001 『里山の環境学』東京大学出版会。
- 野中健一・池口明子 2002 「『生き物』からみるモンスーンアジアの人間—環境関係—ベトナムのフィールドワークからの地理学的展望—」人文論叢（三重大学）16：191-216
- 兵庫県保健環境部環境局環境管理課 1980 植生調査報告書（兵庫県）『第2回自然環境保全基礎調査』環境庁
- 1988 植生調査報告書（兵庫県）『第3回自然環境保全基礎調査』環境庁
- 広木詔三 2002 『里山の生態学』名古屋大学出版会
- ホイタッカー R.H. (宝月欣二訳) 1974 『生態学概説—生物群集と生態系』培風館
- 八木哲浩・石田善人 1971 「兵庫県の歴史」『県史シリーズ』山川出版社
- 安室 知 1989 「稲の力—水田における漁労活動の意味—」日本民俗学 178号：61-99
- 鷺谷いづみ 1999 『生物保全の生態学』共立出版
- 2001 「保全生態学から見た里地自然」武内和彦・鷺谷いづみ・恒川篤史編『里山の環境学』東京大学出版会：9-18
- Ayzama, S. 2003 *Rapid Turnover and Edge Effects in Dung Beetle Assemblages (Scarabaeidae) at a Bolivian Neotropical Forest—Savanna Ecotone*. Biotropica 35 (3): 394-404
- Calow, P. (ed.) 1998 *The Encyclopedia of Ecology & Environmental Management*. Blackwell Science. 224
- diCatri, F., Hansen, A. J. & Holland, M.M. (ed.) 1988 *A New Look at Ecotones: Emerging International Projects on Landscape Boundaries*. Biology International. Special Issue 17. IUBS, Paris
- diCatri, F. and Hansen, A. J. 1992 *The Environment and Development Crises as Determinants of Landscape Dynamics*. In Hansen, A.J., diCatri, F. (ed.) *Landscape Boundaries: Consequences for Biotic Diversity and Ecological Flows*. Springer-Verlag, New York
- Godefroid, S. and Koedam, N. 2003 *Distribution pattern of the flora in a peri-urban forest: an effect of the city-forest ecotone*. Landscape and Urban Planning 65, 169-185
- Heliölä, J. et al. 2001 *Distribution of Carabid Beetles (Coleoptera, Carabidae) across a Boreal Forest—Clearcut Ecotone*. Conservation Biology, Vol. 15, No. 2, 370-377
- Holland, M. M. and Risser, P. G., Naiman, R. J. 1991 *Ecotones: The Role of Landscape Boundaries in the Management and Restoration of Changing Environments*. Chapman and Hall, New York
- Lachavanne, J. B. and Juge, R. (eds) 1997 *Biodiversity in Land—Inland Water Ecotones*. Man and the Biosphere Series, Vol. 18. UNESCO, Paris
- Lepart, J. and Debussche, M. 1992 *Human Impact on Landscape Patterning: Mediterranean Examples*. In Hansen, A.J., diCatri, F. (ed.) *Landscape Boundaries: Consequences for Biotic Diversity and Ecological Flows*. Springer-Verlag, New York
- Molles, M. C. 2002 *Ecology: Concepts and Applications*, Second Edition. McGraw-Hill
- Risser, P.G. 2002 *Ecotones*. In Munn, T. (ed) *Encyclopedia of Global Environmental Change 2*. John Wiley & Sons. 283-288
- Williams, S. E. and Marsh, H. 1998 *Changes in Small Mammal Assemblage Structure across a Rain Forest/Open Forest Ecotone*. Journal of Tropical Ecology 14: 187-198

URL

「沢内村ホームページ」<http://www.villsawauchi.iwate.jp/>

---

「超お役所サイト丹波篠山へのいざない」 <http://www.city.sasayama.hyogo.jp/>

「電子閲覧室」(気象庁) <http://www.data.kishou.go.jp/>

「地図閲覧サービス ウォッチず」(国土地理院) <http://watchizu.gsi.go.jp/>

(京都大学大学院農業研究科, 国立歴史民俗博物館共同研究ゲストスピーカー)

(2004年7月30日受理, 2005年1月15日審査終了)

付表 山菜名称対照表

標準和名	篠山呼称	沢内呼称	学名
アキタブキ	—	フキ	<i>Petasites japonicus</i> var. <i>giganteus</i>
アキタブキ (花茎)	—	バツケ	<i>Petasites japonicus</i> var. <i>giganteus</i>
ウド	ウド	ウド	<i>Aralia cordata</i>
ウワバミソウ	—	ミズ	<i>Elatostema umbellatum</i> var. <i>majus</i>
エゾニュウ	—	サク	<i>Angelica ursina</i>
オオバギボウシ	—	ウルイ	<i>Hosta montana</i>
ギョウジャニンニク	—	ギョウジャニンニク	<i>Allium victorias</i> var. <i>platyphyllum</i>
クサソテツ	—	コゴミ	<i>Matteuccia struthiopteris</i>
コシアブラ	—	コサバラ	<i>Acanthopanax sciadophylloides</i>
サワアザミ?	—	アザミ	<i>Cirsium yezoense</i> ?
サンショウ	サンショウ	サンショウ	<i>Zanthoxylum piperitum</i>
シオデ	—	ヒデコ	<i>Smilax riparia</i> var. <i>ussuriensis</i>
スギナ (胞子茎)	ツクシ	ツクシ	<i>Equisetum arvense</i>
セリ	セリ	セリ	<i>Oenanthe javanica</i>
ゼンマイ	ゼンマイ	ゼンマイ	<i>Osmunda japonica</i>
タラノキ	タラノメ	タラボ	<i>Aralia elata</i>
チシマザサ	—	タケノコ	<i>Sasa kurilensis</i>
ノビル	ノビル	ヒロッコ	<i>Allium grayi</i>
ヒレハリソウ	コンフリー	—	<i>Symphytum officinale</i>
フキ	フキ	—	<i>Petasites japonicus</i>
フキ (花茎)	フキノトウ	—	<i>Petasites japonicus</i>
ミツバ	ミツバ	ミツバ	<i>Cryptotaenia japonica</i>
ミヤマイラクサ	—	アイコ	<i>Laportea bulbifera</i>
モミジガサ	—	シドケ	<i>Cacalia delphinifolia</i>
ユキノシタ	ユキノシタ	—	<i>Saxifraga stolonifera</i>
ヨブスマソウ	—	ボンナ	<i>Cacalia hastata</i> var. <i>orientalis</i>
ヨモギ	ヨモギ	ヨモギ	<i>Artemisia princeps</i>
ワサビ	ワサビ	ワサビ	<i>Wasabia japonica</i>
ワラビ	ワラビ	ワラビ	<i>Pteridium aquilium</i>

---

## **Wild Edible Plant Gathering Activities Practiced at Ecotones : Two Contrasting Case Studies of Villages in Japan**

SAITO Haruo

Ecotones have recently attracted attention in relation to the preservation of biodiversity and resource management. While there has been discussion of the importance of ecotones as habitats for wildlife, less attention has been given to how people use ecotones. This study examined human practices in ecotones through a field survey of gathering activity of wild edible plants in two contrasting villages: Sasayama and Sawauchi. Sasayama is located in the warm-temperate forest zone in the central part of Japan. Now most of the area is covered by substitutional vegetation. Sawauchi is located in the cool-temperate forest zone in the northern part of Japan. A comparatively large proportion of natural vegetation remains there. People who live in Sasayama collect wild edible plants at the secondary ecotone caused by agricultural activities. By contrast, people who live in Sawauchi select either a primary ecotone, caused by a freshet or snow glide, or a secondary ecotone, caused by forestry activities, according to what they want to gather. In Japan changes in people's lifestyle are causing rapid changes in the vegetation around them and consequently in the status of habitats of wild edible plants. We can also see some changes in how wild edible plants are used in these cases. These facts suggest the following three points, 1) The importance of ecotones as sites for gathering wild edible plants: Many wild edible plants prefer to grow at ecotones, so gathering activity is reliant on such ecotones, which represent limited areas in the local environment. 2) Disturbance and variety of ecotones: Ecotones are produced by both natural and artificial disturbance. Character of ecotones varies according to what kind of disturbance the ecotone has been made by. This means that people have many alternatives for gathering wild edible plants. 3) Transience of the culture of using wild edible plants in response to environmental change: Even when an ecotone is produced by human disturbance, wild edible plants grow there independently of further human intervention. People think they grow there "naturally", in fact. People are not so interested in the change in productivity of wild edible plants and have no inclination to manage the resources. We can consider that the culture of using wild edible plants is changeable in response to environmental change.